3.

『俺が男と付き合ったら、嫌ですか？』

嫌だ、と木兎が答えると、赤葦は「なぜですか？」と質問を重ねた。

――だって赤葦は俺のだし。

オモチャを取られて拗ねているこどものような答えには、いつもみたいな無表情ではなくて、呆れたような困ったような表情と溜息が返ってきた。

「でも、俺が女子に告られても木兎さんなにも言わないでしょう？」

――ああ、なるほど。そういうことか。

正直に言ってしまうと、赤葦が女の子に告白されるのもあまり嬉しくはない。木葉や小見のように「ずるい」とか「なんで赤葦ばっかり」とは思わないが、やはり赤葦の関心を木兎やバレー以外のことに向かせようとするものは面白くないのだ。

木兎が今まで口を出さなかったのは単に、赤葦は女の子とは付き合わないような気がしていたからだ。

同年代の男たちのように『恋愛』とかそういうものに興味を持って浮かれる赤葦の姿がまったく想像できない。
ただしこの場合、赤葦も自分と同じエロく健全な男子高校生だという事実は都合よく棚上げしている。
男はダメだと思う理由は――。
――インハイ前になにかあったら困るから。
冒頭の質問より前に言ったことを木兎は繰り返した。
「だから……、なにかなんてあるわけないでしょ」
心底うんざりしたような顔と声音で言って、赤葦は首を振った。
木兎の考えることは大抵わかってくれている赤葦だが、この件に関しては駄目なようだった。話が噛み合わなくて苛々が募る。
このときの部室内は茹だるような暑さで、こめかみから顎へと伝い落ちた汗がズボンに濃いグレーの水玉をポツポツと作った。それがなんだか面白くて見入っていたら、柔らかい布が額や頬にぽんぽんと押し当てられた。赤葦のハンカチだった。
「俺もタオル持ってる。ロッカーの中」
「じゃあ汗拭いてくださいよ」

「でも赤葦が拭いてくれるならいいかな、って」
「もう拭かないです」
そう言いながらも、じっと赤葦を見上げて動かない木兎のかわりに赤葦が木兎の汗を拭い続けた。
赤葦の頬にも首筋にも汗の玉が浮かんでいて、木兎はその汗の玉を、舐めてみたい衝動に駆られた。
昼休み終了のチャイムが鳴らなかったら、きっと実行に移しただろう。
人差し指で赤葦の汗を掬い、舌先にのせて味わうのだ。
ちょっと普通ではない木兎の行動に、赤葦は驚いて固まってしまうかもしれない。
動けなくなった赤葦の首筋に指を滑らせる。しっとりと湿った肌は、吸いつくような滑らかさを指先に伝えてくるに違いない。
「ぼ…くとさん」
木兎の名前を呼ぶ声が震えても気づかないふりをする。
今度は指ではなくて、直接肌に舌を這わせたら赤葦はどんな反応をするだろうか。
そっと撫でるように舐めて、唇で啄ばんで、弾力を確かめるように軽く歯をたててみるのだ。

きっと赤葦は小さく息をのみ体を竦ませ「ぼくとさん」と縋るような声で木兎の名前を呼ぶ。
ああ……その時のアイツの顔が見たい。

「あああああもう！」
木兎の叫び声に同調するように、隣りの家の犬が長い長い遠吠えをした。今さらながらに両手で口を覆い、また溢れ出しそうになる叫びを堪える。
夕食と風呂が済んだあと自室に戻った木兎は、ベッドに寝転がって昼間の部室でのアレコレをつらつらと思い返していた。始めはそれだけだった……のに。どういうわけか途中から健全な思考が不埒な妄想に切り換わってしまった。
いや、どういうわけかもクソもない。
だって赤葦が、真面目で強気で何事にも動じなさそうな太々しい無表情をいつも貫いているあの後輩が、エロい声と仕草で自分の名前を呼ぶから……。
いやいや、違う。ごめん赤葦。エロい声を出したのは木兎の妄想内の赤葦で、エロい仕

草をさせたのも木兎なのだ。
いやいやいや、違う違う。ほんとごめん赤葦。真面目で強気なのは本当だが、赤葦は太々しい無表情だけをしているわけじゃない。表情筋がサボり気味なのは確かだが、普段無表情に近いだけに感情の変化はわりとわかりやすく表れる。嬉しいとか楽しいとか、そういう時に見せる赤葦の微笑みは文字通り「微かに笑む」なのだが、ギャン泣きしている赤ちゃんが一瞬で泣き止んで笑いだすぐらいには優しくて可愛い（赤ちゃんがじゃなくて赤葦がである）のだ、と木兎は思っている。
ほんとうにほんとうにごめん、赤葦――。
パジャマ代わりにしている柔らかいスウェット地のハーフパンツに視線を落とす。
そのハーフパンツの一部を緩やかに押し上げている己のムスコが「そろそろ認めろ」と言っている。
赤葦京治がエロいという事実を。ただそこにいるだけでそこはかとない色気が漂ってしまっているという事実を。
いや、わかってはいたけど！
木兎が認めてしまったら、周りからの不埒な視線で赤葦が汚されてしまう気がして嫌だったのだ。

実際は木兎が認めようが認めまいが赤葦がエロい事実は変わらないのだが。
赤葦のエロさを目の当たりにした野郎どもの脳内で、口に出すのも憚られるような卑猥なアレコレを赤葦がされているかと思うと頭に血が上る。ついでに下半身にもグッと血が集まる。
「襲われるわけない、なんて呑気すぎる」
しかし木兎の心配をよそに、これからも赤葦は無防備に色気を撒き散らすのだ。
『なんでそんなになってるんですか？』
妄想内赤葦が木兎の股間を一瞥して呆れたように零した。
「おまえが……他の男に黙って体を触らせてるから……」
本当は、ただ触られているだけではなくて、体中を撫でられて舐められていろいろなところを弄られて、なおかつ赤葦が気持ちよさそうに善がっていたから……なのだが、いくら相手が木兎の作り出した架空の赤葦でも、妄想の詳細を教える気にはなれなかった。だって、あれはあまりに……ヒドすぎる。
『俺が触られてるのを見ると木兎さんは勃起するの？』
「……う…、ごめん」
『謝らなくていいですけど。見てるだけでいいんですか？　木兎さんは俺に触らないの？』

「さ、さわらないよっ…！」
『へえ。本当に？』
一歩後ずさった木兎を見つめながら、赤葦はちろりと自分の下唇を舐めると、挑発的に微笑んだ。そしておもむろに練習着の裾から手を中に滑りこませ、体を撫で始めた。
へその辺り、脇腹、胸と、服の下でもぞもぞと手を動かしているのがわかる。胸のところで留まった手は、そこにあるであろう小さな突起を集中的に弄りだしたようだ。ツンと立ちあがったソコをくにくにと指で摘まんだり爪先で弾いたり、赤葦の指が、木兎が女のソコを弄るときと同じように動いているのを想像する。
『…ふっ…ぁ…』
赤葦の息がはぁはぁと荒くなって、ときどき可愛くてエッチな声が口から漏れる。うっすらと開いた唇の隙間からチロチロと見える赤い舌がエロい。いつもは鋭さと冷静さを湛えている瞳が、今は快感に潤んで木兎を映している。
『ねえ…、ぼくとさん……俺に、触って？』
切なげな声で呼ばれ、うっかり手を伸ばしそうになった。
「だ…、だめだよ赤葦……」
答える自分の声は上擦っている。吐息も熱が籠って荒い。

『どうしてですか？　木兎さんだって、もうそんなになってるのに。いっしょに気持ちよくなりましょう？』
「……だめだよ」
これは木兎の妄想だ。本物の赤葦はこんなこと絶対に言わないし、しない。
これ以上、大事な可愛い後輩を淫らな妄想で汚してはいけないと思っている。思ってはいるのだが、ダメだと思えば思うほど、目の前の妄想赤葦はエロく木兎に笑いかけ大胆に誘ってくる。
腰の奥にますます熱が溜まっていく、股間が張りつめる、もう痛い……。
「ああー……、ほんとに、ダメなんだってば！」
とうとう我慢ができなくなって、木兎はハーフパンツの中に手を突っ込んだ。
硬く大きく膨れた性器はもはや熱を吐き出さないことには鎮まってくれそうにない。いつもオナニーのオカズにしているエッチな画像や動画を見たときより反応がいいってどういうことだよ……と、呆れと罪悪感を腹に抱えつつ、先の刺激を期待しまくっている屹立を握り、ゆるゆると上下に扱く。性器へのダイレクトな刺激が重い快感となって腰全体を覆う。
『ぼくとさんのソレ…やっぱり大きいですね。ああもうガチガチ。エッチな汁もいっぱい

出てる……』

耳元で揶揄うように赤葦が囁いた。

気づけば赤葦はぴたりと木兎に寄り添って、性器を扱く木兎の右腕に手を添えている。

『ぼくとさん、俺もぼくとさんの、触っていいですか？』

「うん……触って」

『じゃあ、ぼくとさんは俺のを触ってください……』

いつの間にかふたりとも身につけていたハーフパンツと下着を脱ぎ捨てている。赤葦は木兎の性器に手を伸ばしながら、逆の手で木兎の空いている手を自分の股間へと導いた。赤葦の剥きだしの股間には黒々とした濃い茂みと芯を持って勃ち上がったペニスが見える。

木兎は促されるままに赤葦の勃起したペニスに触れた。赤葦のソレは木兎のものより少し細かったが、もう木兎と同じくらいガチガチに硬くなっていて、木兎のものよりも熱く濡れていた。他人の勃起した性器など初めて触るが（と言ってもこれはあくまで木兎の妄想なのであるが…）、グロテスクで嫌悪感を抱いてもおかしくなさそうなソレが、赤葦のものだと思うと妙に興奮するから不思議だった。

『いやだ。そんなにじっと見ないで』

興奮で上擦ったような声で言われたら、よけいに見たくなってしまう。煽られていると

しか思えない。
「見なくちゃ触れないもん」
『嘘…ばっかり……っ、…あ…ん』
裏筋を親指で撫で上げ、亀頭を手の平で包みこむようにくるりと刺激すると、赤葦の腰がびくんと跳ねた。
「これ、きもちいい？」
『……はい』
「じゃあ、これは？」
輪にした指で絞るようにペニスの根元から括れまでを一気に扱き上げ、親指の腹で鈴口を捏ねるように刺激する。
『あっ……あ…っ』
赤葦は可愛い喘ぎを漏らしながら腰を揺らしている。それと同時に木兎の手の動きをなぞり、木兎のペニスも同じように弄ってくれている。
ふたりして目を閉じて、しばし相手の手から与えられる快感に集中する。お互いの荒い息遣いと、いやらしい水音が耳に響いて頭の芯が甘く痺れた。
『ね…、ぼ…くと…さん…、俺、も…イク、出ちゃう…っ』

「ん……、俺も…っ」
手の中で赤葦のペニスがびくびくと震えながら弾けた。それとほぼ同時に、木兎も赤葦の手の中で思いきり気持ちよく射精した。

部活中はまだなんとかなっていたと思う。集中しろ！　だとか、どこ見て打ってやがる！　だとか、何度かコーチに怒鳴られはしたが、怪我をすることもなく一応の練習メニューはこなすことができた。
しかし通常の練習が終わり、赤葦とのスパイク自主練を始めたらもう誤魔化しは効かなかった。タイミングは合わない、ボールを打ててもまともにコートに入らない。しょうもないスパイクミスを連発して、とうとう木兎はコート中央に大の字で寝転がった。
部活中もずっと違和感があったのだろう、赤葦は特に不思議がる様子も見せず木兎の隣りに静かに腰をおろした。
「具合いが悪いわけじゃないですよね？」
「悪くない」

「でも調子はよくない？」
「よくない……というか、俺が悪い」
「そうですか」
なにがあったとか、どうしたんだとか、そういうことを赤葦はほとんど訊かない。木兎の表情や行動を注意深く観察して、どうするのが最善なのかを探る。きっと今もいろいろと考えている最中なんだろう。
ごめん。申し訳ない。いろいろ考えてもらっても今日の不調はどうにもならない。と木兎は頭の中で平謝りする。
昨夜、あらぬ妄想に赤葦を出演させ気持ちよく抜いてしまった。その罪悪感から今日は赤葦の顔がほとんど見られないでいた。スパイカーがセッターをまともに見ないでスパイクなんて打てるわけがない。
こんな浮ついた中途半端な状態で練習しても意味はないし怪我も怖い。
「今日はもう上がろう」
明日の天気を雪に変えそうなぐらいレアな木兎の発言（ちなみに今は七月である）に異を唱えることもなく、赤葦はただ、床に転がる木兎に視線を向けた。
上がろうと言いつつも動こうとしない木兎をじっと見ている気配がする。今日の自分の

挙動がおかしいのはわかっているが、赤葦のほうもなんだか今日はちょっとおかしい。
沈黙が居心地悪く感じて、そろそろ起き上がろうかと思った瞬間、天井に向けていた視線が赤葦の顔に遮られた。つまり、木兎の顔の両側に手をついて、赤葦が木兎の顔を見下ろしているという状態になった。
なんだろう？　と思いつつもじっとしていると、赤葦の顔がゆっくりと下りてきて、少しカサついた感触が唇の上にのせられた。
「……え、なんで？」
軽く押しあてられただけのものだったが、今のは紛れもなくキスだった。
赤葦は普段、意味のないこと無駄なことをしない。だから今のキスにもきっと理由があるんだろう。しかし周りに誰もいないとはいえコートのど真ん中で赤葦にキスされる理由など木兎には見当もつかなくて、ただ、混乱した。
質問に答える気がないのか、赤葦は未だ黙って木兎を見下ろしている。
「なあ赤葦。なんで？」
繰り返して訊くと、赤葦は木兎の上から体をずらし、横に座り直してから小首を傾げた。
「俺、竜田揚げ定食を奢る羽目になったんですけど」
この場面にそぐわない単語が出てきて、ますます木兎は混乱する。

「は？　竜田揚げ？　てことは木葉？　木葉がどうかしたの？」
「いえ、木葉さんは直接関係ないんですけど。ちょっとその辺りはハッキリと答えが出ないので、とりあえずハッキリ確認できそうなことから確認していこうかと思いまして」
……意味がまったくわからない。木兎に対して、いつもは何事もわかり易く簡潔に話す赤葦にしては珍しい。
「あ、ああ…そう。なんかぜんぜんわかんないけど今ので確認できたの？」
「それを木兎さんに訊きたいんです。無理じゃないですか？」
「無理？　なにが？」
「だから今の――」
キス、ともごもご口篭るのが可愛かった。そんな赤葦の姿を見ていたら気持ちに余裕がでてきて、ちょっと困らせてみたくなった。
「じゃあもっかいしてみて。無理かどうか、さっきのじゃよくわかんなかった」
言ったあとで、わからないわけねえじゃん、と心の中で自分に突っ込む。赤葦も同じことを思ったのだろう。呆れたような流し目を一つ木兎に寄越し、これ見よがしな溜息をついた。
すぐそばにあった赤葦の手に触れ、早くと促す。木兎の指先が触れた瞬間、赤葦の体が

微かに強ばった。
「赤葦」
ほんの少しいつもより強めた口調で名前を呼ぶと、諦めたのか、さっきと同じように上体を倒して木兎に顔を近づけてくる。
そしてもう一度、触れるだけのキスをした。
温もりを感じられたのは僅か一瞬。離れていく唇の感触が惜しいと思った。
もっと――と、腹の底から湧き上がる強く甘い欲求。
「それじゃわからねえよ」
「ぼくとさ――っ…」
手を伸ばして赤葦の後頭部を押さえ、自分の方へぐっと引き寄せる。制止の一言を告げられる前に唇を塞ぎ、驚きで僅かに開いていた歯列の隙間から舌をすべりこませた。昨夜の妄想では唇にキスをしなかったな、などとと考えながら、本物の赤葦の口内を味わうように探る。舌の表面、裏側、頬の内側、上顎、赤葦はどこも敏感で、木兎の舌先が触れるたびに体がびくりと小さく跳ねる。物慣れていないようなその反応が新鮮で、木兎はキスに夢中になった。お互いの舌を擦りながら絡み合わせるのが気持ちいい。気持ちよすぎて、口の中がじんじんと痺れたようになるまでしつこく貪ってしまった。

「んっ…ぐっ…っ」
赤葦の喉元から漏れてくる声がいよいよ苦しげな色を帯びてきたので、仕上げのように、混ざり合ったふたりの唾液を飲みこんでから後頭部を押さえていた手を離した。
(やっぱり、もうちょっとしていたかったな)
ゆっくりと遠ざかっていく赤葦の唇を見ながら思う。
赤葦は木兎の隣りにどさりと倒れるように寝転がり、天井を見つめて胸を激しく上下させている。
「えーと……だいじょぶ?」
「……だいじょうぶれ、……です」
いつもはハキハキと話す赤葦の呂律の回らない口調。聞き慣れないその甘やかな口調が、キレッキレのストレートのようにズドンと胸の真ん中を打ち抜いた。
ヤバい、ときめく、息できねえ――などと思いながらTシャツの胸元を掴んで悶えていたら、のそりと上体を起き上がらせた赤葦が、俯いたまま小さく頭を下げた。
「すみません、初めてだったので……上手くできなくて、すみません」
ズドン…と本日二度目の衝撃を食らい、思わず床から跳ね起きた。
「はじめて?!　え、え?　今の、はじめてなのっ?!」

「……そうです。……いけませんか？」

揶揄われたと思ったのか、眉間に深い皺を寄せて赤葦が木兎を睨みつけてくる。そのキツい視線にすら胸が擽られて鼓動が速まった。

赤葦は、自分の周りにいる男たちのように恋愛事に興味を持って浮かれたりなどしないと木兎は勝手に思っていたが、実際その通りだったのだろう。今までに一度もキスをしたことがないというのはそういうことだ。

赤葦のファーストキスを貰ってしまった――。木兎は決して処女厨などではないが、赤葦の初めてを許された事実が無性に嬉しかった。

だって赤葦に特別扱いされるのは心地がいいのだ。木兎は赤葦に特別扱いされるのが大好きなのである。

しかし本物の赤葦はやはりクールで硬派だった。昨夜、木兎の脳内で痴態を演じた赤葦は妄想上のニセモノでしかない。

見た目は硬派なのに、仕草や雰囲気がエロいこのギャップが人を妙な気分にさせる原因かも……とまた勝手なことを想像する木兎を、赤葦は怪訝そうな顔で見ている。

「木兎さん？」

「あー…、えーと、無理じゃなかった？」

「……それ、さっき俺が訊いたんですけど」
「あ、そうか」
起こった出来事のインパクトが強すぎて――と言っても二度目の深いキスは木兎からねだったものだが――、事の発端と一連の流れが頭からすっかり飛んでいた。質問の意図はさっぱりわからないが、赤葦とのキスが『無理か否か』を訊かれていたのだ。
答えは〇・五秒もかからずに出てくる。
「無理じゃない」
当たり前だ。無理なわけがない。無理なら軽いキスをされた時点でこの場から立ち去っている。もっとしたいなんて思わない。
しかし赤葦は、木兎のこの返事に納得も満足もしてくれなかった。
「なんでですか？」
「え？」
「なんで無理じゃないのか、木兎さんはわかりますか？」

正直に言ってしまうと、「まったくぜんぜんわからない」である。
キスをして平気な理由なんて「嫌いじゃないから」ぐらいしか思いつかなかった。
家に帰る途中、アプリでメッセージを送ってみたら既読マークはすぐについたけれど返事はこなかった。赤葦は基本、「はい」や「いいえ」の短い返事しか送ってこない。でも、既読スルーは絶対にしない。つまり木兎の送った「嫌いじゃないから」は、お気に召さなかったか間違いだったかということなんだろう。
木兎は日々直感と本能で生きている男である。難しいことを考えるのが苦手で、考えなくてはいけない問題は避けるか投げ出すのが通常スタイルだ。しかし赤葦のこの問いだけは放り出してはいけない気がするのだ。もちろんこれも直感である。

一度寝つくと朝まで絶対起きない性質なのに、昨夜は夜中に何度も目が覚めてしまった。朝ごはんだっていつもの半分しか食べられなかった。一つのことが気になると別のことに集中できないのがわかっていたから、今日の朝練は基礎トレだけにした。
二日も続けて妙な調子の木兎を見てメンバーたちは赤葦に頼ろうとしたが、赤葦が困ったように肩を竦めるだけだったのでいろいろ察したらしい。体育館の隅でストレッチをしている木兎のそばに寄ってきた木葉は「早く赤葦に謝れ」とだけ言ってコートに戻って行

った。
喧嘩したわけでも怒らせたわけでもないが（たぶん）、赤葦とコミュニケーションが取りづらくなったこの状態が謝って解消されるならいくらでも謝るのに、と思ってしまう。
赤葦のトスが打ちたい……。
まともに赤葦のトスを打てていない期間はまだ一日だけなのだが、時間と体力（これは主に赤葦のである）が許す限りトスを上げ続けて欲しいと本気で思っている木兎にとっては絶望的に過酷な長さであった。
午前中の授業の記憶はほとんどない。（ちなみに午後の授業の記憶があることもほとんどない）腹の虫が鳴って昼休みになったことに気づいた。僅かな期待をこめてスマホを確認するも、通知画面を見て落胆する。授業中に赤葦がメッセージを送ってきたことなどほとんどないのに、通知欄に赤葦の名前がないという事実が、放置されている感を際立たせて木兎の気分を重くした。
いつもなら四時間目の授業が終わるのと同時に教室からいなくなる木兎だ。まだ教室に残っていること自体が異例だし、デカい図体を縮こまらせて項垂れている姿は異様だった。
「おいおい、木兎しょんぼりモード？」
弁当を買いに行きかけていた隣の席の男が鬱陶しそうに苦笑する。

「ちがう……しょぼくれモード」
「訂正すんのそっちかよ」
サッカー部の主将でありフォワードの選手として全国的に有名らしいその男は、木兎と立場が似ていることもあってわりと仲のよい友人である。似ているというのは部活内や競技のポジション的なものだけではなくて、女子にそこそこキャーキャー言われるようなところもである。そしてこの友人にとっても「部活と私どっちが大事なの」はタブーなのだ。
境遇が似ているこの友人なら木兎の悩みに共感してくれるかもしれない。そして解決もしてくれるかもしれない、と、めちゃくちゃ他力本願な考えが頭をよぎった。
「おまえさ」
「ん？」
「俺とチューできる？」
木兎の唐突な質問に友人は目を見開いた。そりゃそうだ。相手が男だろうが女だろうが、いきなり「キスできるか」などと訊かれて驚かないほうが珍しい。というかこの質問は完全にセクハラである。
「罰ゲームかなにかですか?!」
「え、俺とのチューは罰なの？　それは俺のことが嫌いだから？」

「は?!　嫌いじゃねえけど、ってか、そういう問題じゃなくね??」
「嫌いじゃなきゃできるじゃん?」
「いやいやいや。おまえの倫理観どうなってんの。嫌いじゃなきゃいいってもんじゃないだろ。俺は好きな子としかしねえよ」
「そういうもん?」
「そういうもんです!」
リンリカンというものが具体的にどういうものか理解できなかったが、木兎のそれは普通とちょっと違うらしかった。
(だから赤葦は返事をくれなかったのか……)
赤葦に送った「嫌いじゃないから」は、やはりあまり良い回答ではなかったことが判明した。
そしてもう一つ判明したことがある。
普通のリンリカンを持っていると好きな相手としかキスしないらしい。間違いなく普通のリンリカンを持っているであろう赤葦が木兎にキスをしたということはつまり――。
(赤葦って、俺のこと好きなのか)
目から鱗が落ちたとか天啓を得たとかまさにそんな感じで、自分に纏わりついていたモ

ヤモヤが一瞬で消え去って視界がクリアになった気がした。

赤葦に嫌われているとはもちろん思っていなかったが、赤葦が嫁だのオカンだのと言われるほどに木兎の世話を焼いていたのは生真面目なセッター気質ゆえだと思っていた。木兎がなにも言わなくても木兎のしたいことをわかってくれる、感じていることを汲み取ってくれる、赤葦がそばにいるときの心地の良さは、エースとセッターの間に結ばれた絆とか信頼関係からもたらされているものだと単純に思っていたのだ。我ながら鈍いにもほどがある。

赤葦京治という男は、バレーボールには熱いが基本的に興味のないこと面倒くさいことには一切の労力を払わない。そんな男が、鷹揚だとか天真爛漫だとか言えば聞こえはいいが、大雑把で能天気で甘ったれな木兎（自分で言ってて情けない…）のそばにコート外でもいてくれるなんて、特別な情も持たずにできるはずがなかったのに。

木兎を悩ませたあの問いかけも、キスも、鈍感極まりない木兎への赤葦なりのアピールだったのか。いじらしいというかなんというか、可愛らしすぎて泣けてくる。

「なにいきなりニヤついてんの？　キモいんだけど」

サッカー部の友人が心底嫌そうな顔をする。ほんの数分前までキノコを生やしそうなほど鬱々としていた木兎が、唐突に奇妙な質問をしたかと思えば今度はしまりなく目尻を下

げているのだ。引きたくなるのもわかる。が。
「だって、やべえ……嬉しい。アイツ、ほんとに俺のもんだった」
色恋になど微塵も興味がありませんなんて澄ました顔の下で、赤葦は木兎への熱い想いを湛えていたのだ。
他の人間を遠ざけるための方便でもなく、ほんとうにほんとうに、赤葦は木兎のものだったのだ。
赤葦は俺のもの。
校内中をそう叫んで回りたい気分だった。

4.

今朝の木兎の不調は明らかに赤葦のせいだった。自分から妙なことを仕掛けておきながら、しょぼくれた木兎を見るとどうにかしてやりたくなるのだから始末に負えない。
自分が抱えたこの想いが報われるはずもないことは知っている。だからと言って簡単に捨ててしまえるほど軽いものではないし、忘れてしまえるほど意志も強くない。
赤葦の望む意味でなくても独占欲の滲む言葉を木兎の口から聞けば背筋が震えるほどの喜びを感じるのだ。
結局、なにも望まないだの諦めているだのは表面だけ取り繕った方便で、本音の部分では木兎の特別になりたいと思っている。
それがこの数日で身に沁みてわかってしまった。

昼休みの喧騒がいつも以上に大きくなって、今日は図書室へ避難しようと決めたときだ

った。
廊下のほうから「赤葦呼んで」とクラスメイトに話しかけている声が聞こえ、その上に女子の「大丈夫ですか？」がいくつか重なる。
ただならぬ雰囲気を感じて名前を呼ばれる前に廊下に出ると、赤葦の姿を見つけた木兎が女子たちの垣根越しに手を振った。
にかりと笑う木兎の左側の頬が痛々しく真っ赤になっている。内心かなり驚きつつも、ここでなにがあったか問い詰めたら騒ぎが大きくなりそうだと判断して、心配げな視線と好奇の視線が混じり合う中木兎を引っ張って部室へと向かった。途中保健室で冷却シートをもらうのも忘れない。
部室の前で木兎の右腕を掴んだままだったことに気づき、自分がどれだけ動揺していたのかを知る。騒ぎを避けるために部室に来たのに、それなりに有名人で目立つ木兎の手を引きここまで連行してきてしまった。その様はかなり異様だったに違いない。
頭を抱えたくなる気分を堪え、木兎をベンチに座らせ頬に冷却シートを貼ってやる。
「で、なにがあったんです？」
「殴られた」
誰に、と訊かなくても予想はついた。

「なんで……」
「別れてって言ったらいきなりグーぱんがきた。女子も怖いな」
グーだぞ、グー！　と拳を握って笑いながら訴えている木兎を、信じられないようなものを見る目で赤葦は見つめた。拳で誰かを殴りつける女にも驚くが、そうされても仕方のないことを平然としてきたであろう木兎にも驚く。
少なくとも一昨日までは恋人として仲睦まじく話していたはずだ。彼女には別れの原因など一つも思い当たらなかっただろう。
唐突に別れを告げた木兎の顔には、僅かな執着も未練も浮かんでいなかったに違いない。バレー以外のことに対しては、木兎の興味や関心は驚くほど簡単になくなる。薄情なわけではない。ただ関心と無関心の線引きがはっきりしているだけなのだ。無関心にカテゴライズされた側に勝手にシンクロしてしまい、赤葦はときどき無性に惨めになることがあった。
それでも皆、木兎の特別になりたがる。それだけ木兎の引力は強い。気分屋でわがままで甘ったれな欠点などどうでもよくなってしまうぐらいに強い。
「突然別れてくれなんて言われたら誰だって驚くし腹が立つでしょう」
「早くなんとかしなくちゃと思って」

「……」
なんとかするって、なんだ。仮にも恋人（だった）相手に雑な対応すぎやしないかと眉を顰めていると、木兎は赤葦の顰め面など気にも留めず、あっけらかんと巨大な爆弾を落とした。
「だって赤葦、俺のこと好きでしょ？　俺を赤葦のものにしたかったでしょ？」
木兎の言葉がうまく飲みこめなかった。窓の外から聞こえていたはずの校庭の喧騒が遠のく。呼吸が止まる。目の前で木兎が、不思議そうに首を傾げている。
「え、ちがうの？」
違うなんて微塵も思っていないであろう無邪気で傲慢な瞳だ。
嘘は、つけなかった。今さらつきたくもなかった。
「ちが……わない、ですが」
「そしたら俺に彼女がいたらダメだろ？」
「それは……そう…ですけど」
自分が赤葦とキスできる理由はわからないくせに、赤葦が木兎にキスをした理由は正しく理解したらしい。
朝練のしょぼくれからこれまでの間になにが木兎に起こったのかはわからないが、すっ

かりいつも通りの木兎になっている。というか、いつもよりかなり機嫌がいい。殴られて頬を腫らしているのに。

とにもかくにも伝わるとも思っていなかった赤葦の想いが伝わってしまった。そしてその想いを、木兎なりに受け入れようとしてくれているらしかった。

トスを上げていない間も、コートの外でも、木兎が赤葦だけのものになるのだと言われている。

男同士だ。それが普通でないことも正しくないことだとも知っている。木兎の関心を失ったときのことを考えると怖い。

それでも、たとえ束の間のものだったとしても、『木兎の特別』の座は魅力的だった。自重できるほど大人でもない。欲しい、と思ってしまうのだ。強烈に。

目の前にまっすぐ手を差し出されて迷いは消えた。

木兎の手におずおずと自分の手を重ねれば、その手をぎゅっと握られた。赤葦を惹きつけてやまない強烈なスパイクを打つ、赤葦の大好きな大きくて厚い手だ。この手も、この手の持ち主も、いま赤葦のものになったのだ。

――が。

急な展開すぎて実感が湧かなくて、木兎の手を、確かめるように握り返しながら首を傾

げた。
「俺の……木兎さん？」
「そうだよ。ってか、なに可愛いことやってくれてんの」
握っていた手を強く引かれ、横抱きするように膝の上に載せられる。
「ちょ、ぼくとさんっ！」
焦る赤葦を宥めるためか、木兎の腕が赤葦の背に回ってゆるりと撫でる。これでは宥められるどころではない。
というか、本当に展開が速い。なにより自分たちの周りの空気が甘い。自分を見つめる蜂蜜色の瞳も甘い。
……なんだこれ。なんだこれ。
「暑い……」
「そこは我慢しろよ」
「この体勢恥ずかしい」
「それも我慢しろ」
「でも――」
照れ隠しの悪態を吐き出す口はとうとうキスで塞がれた。咄嗟に食いしばってしまった

唇をちろりと舐められ、力の抜けたところで木兎の舌の侵入を許してしまった。そしてそれは赤葦の口内を一通り撫でて味わってから出ていった。腰から下に力が入らない。もう木兎の膝の上から動けない。

このタラシ……と腹の中で思いきり悪態をつく。

「あのさ、たぶん俺は、嫌いじゃなければ誰とでもキスできると思うんだけど」

「はあ?!　なんだそれ、ざけんな」

我ながらドスを効かせた声を出してしまった。

ちょっと待って最後まで聞いて、と、木兎が赤葦の皺の寄った眉間にちゅっと小さくキスを落とす。誤魔化されるかと思いつつも、目元が勝手に熱くなるのを止められない。

「俺以外として欲しくないって思うのは赤葦だけなんだよ」

だって赤葦は俺のだし。女にだってもちろん男にだって告られてるのもムカつく。本当は赤葦が誰かに見られてるだけでムカつく。と不機嫌そうに言い募る。

「だからなんなんスかそれ」

不機嫌になりたいのは赤葦も同じだった。

俺のものだとか俺以外はダメだとか、独占欲で赤葦を縛る言葉はこれでもかと言うくせに肝心な一言はくれない。

でも、もうこれ以上おとなしく待っている気にもなれなかった。
「それ、『好き』って言うんですよ」
神聖な内緒話を打ち明けるように、木兎の目を見て囁く。
「木兎さんは俺のことが好きなんです」
さらに呪文のように厳かに告げれば、木兎はふわりと甘く微笑んだ。
「うん。そう。俺はあかあしが好きだよ」

※　※　※

賑わう学食の一角。木葉と赤葦はテーブルを挟み、木葉は竜田揚げ定食を、赤葦は焼き魚定食を、黙々と食べることのみに集中していた。
ふたりのまわりの空気だけが真冬の曇天なみに冷たく重苦しい。ちなみに今は梅雨も明け、「熱中症に注意しましょう」と連日テレビで注意警告されているほどスカッと熱い盛夏の七月である。

「まあ、嬉しくないこともないんですが、実感が湧かないというか、あの人ほんとにわかってんのかなーって感じなんですよね。なんかノリだけのような気もするし」
先に定食を食べ終えた赤葦が口を開くと、話の内容を察した木葉が眉間に皺を寄せて顔を上げた。
「そういう話は俺も食い終わってからにしてくれ。せっかくの竜田揚げがまずくなる」
木葉だって部活の可愛い後輩の話はちゃんと聞いてやりたいと思っている。……が、身近な人間の恋バナは如何せん生々しいのだ。
それも木兎と赤葦のである。内容的に『濃い』に決まっている。飯時の話のネタには絶対相応しくない。
「食うの遅いんですよ木葉さん。早くしないと話していられる状況じゃなくなります」
「なんで」
と訊き返してすぐに、木葉は赤葦の言葉の意味を理解した。学食の入口に、見慣れたミミズクヘッドが現れたからである。
「昼は学食で食うってあいつに言った？」
「言ってません」
「おまえの位置情報、逐一チェックされてんじゃね？」

怖いこと言わないで下さい、と赤葦は顔を顰める。
木兎の赤葦探索センサーが鋭いのか、赤葦の木兎引力が強いのか、その両方か……。いずれにしても薄ら寒い。
「なんでふたりだけでメシ食ってんの！」
デカい声で言いながら、木兎は当然のように赤葦の隣りに座った。そして当然のように赤葦の肩を抱く。
「木兎さん声がデカいです」と赤葦は窘めるが、肩を抱くなとは言わない。しかしこれが木兎と赤葦にとっての普通の距離感だ。おかしくはない。
「あー、木葉に奢ることになったって前に言ってたアレ？」
木葉と赤葦がふたりでいるという状況、そして木葉の前にある竜田揚げ定食から、木兎は例の『賭け』に思い至ったらしい――のだが。
「木兎にアレ言ったの？」
「内容までは言ってません。奢ることになった、とだけ」
「俺がわかんない話するのダメ！　ムカつく！」
嫉妬深い旦那丸出しなことを喚きながら木兎が赤葦に抱きつき、額を頭にぐりぐりと押しつけている。「木兎さん、痛いし暑苦しいです」と言いつつもやはり赤葦は木兎の腕の

拘束から逃れようとはしない。そしてこんなことをしていても、このふたりは周囲の人間から奇異の視線を向けられたりはしないのだ。

……公認かよ。ていうか慣れって怖い。

「まあ『ホモ目的』じゃねえときでもそんな感じだったからなぁ。実感湧かねえってのもわかるけど、ノリだけってことはないんじゃね？」

「そうなんですかね……」

なんだそれ、と不機嫌そうに木兎が横から口を挟む。

「ノリだけで男と付き合わねえよ。そこまで相手に困ってなかったし。つーかノリだけで抜けるわけねえじゃん」

木兎の露骨な発言に赤葦は目を見開いた。木葉も白飯を喉に詰まらせそうになって噎せた。

どうでもいいが、話の流れも詳細も知らないくせに時々ズバリと核心を突いてくる木兎のこれはなんなのだ。動物的勘か。そして木葉は知っているとはいえ、赤葦と付き合い始めたことを木兎は隠す気もないのだ。……大丈夫か。

「え、それってつまり、俺で抜けるんですか？　俺で抜いたってことですか？？　え、いつ？」

「んー？　わりと前」
「うそ……」
「なんで嘘つく必要があんの」
いや、だからちょっと待て待て、落ち着け。所構わずふたりの世界を作るのはまあいい（よくはない）として――。
「突っ込まなきゃいけねえのはそこじゃねえぞ赤葦！　ていうかおまえのオナニー事情なんてメシ時に聞きたくねえんだよ、木兎!!」
咳きこみながらも木葉は強く訴えた。
「木葉さん、声デカすぎです」
「木葉のえっち～」
ふたりから同時に責められ、周囲からは非難の視線を向けられ、理不尽さに泣きたくなった木葉であった。

Epilogue.

『今週末、親が旅行で家にいないんです』

だからウチに泊まりに来ませんか？　なんて、恋人になったばかりの相手に可愛く（木兎フィルター搭載）言われたら、心身ともに健康な男子高校生としては「ソッチの期待」をしてしまうのは当然だと思う。誘われていると思ってしまうのも当然だと思うのだ。

思うのだけれども！

「えーと……、俺、早とちった……？」

自分の体の下で顔を引き攣らせて固まっている赤葦を目にして、木兎の鼓動は嫌な感じで速くなった。

赤葦は男なのだ。女の子相手の手順をそのままなぞってはいけないとわかっている。が、今まで木兎が付き合ってきたのは女の子のみなのだ。参考対象が女の子しかいないのだから少々対応を間違えても仕方がないじゃないか、と言い訳させてほしい。

たとえば元彼女に前述のセリフを言われたときは、百パーセントお泊り＆セックスの流

れだった。例外はない。百パーセントだ。それどころか、親が家にいようがお泊りじゃなかろうが、彼女の部屋に訪れる、または木兎の部屋でふたりきりになるイコールセックスだったわけである。

だって部活で忙しい木兎が彼女とふたりきりですごせる絶好の機会なんてほとんど無かったわけだし。明け透けに最低なことを言ってしまえば、何度かデートして愛を育んでからセックス――なんて手順を踏む手間も時間も惜しかったのだ。リビドーに従って肉体的コミュニケーションを取ることも大事だと思う。……相性の問題もあるわけだし。

しかし！　である。

土曜日の夕方、平日より早めに設定されている部活の終了時間に従い、自主練もせず、「どうした木兎腹でも痛いのか？　ヘンなモノでも食ったか?!」と心配するチームメイトを華麗に躱して赤葦宅にやってきた。赤葦のおばさんが作り置いてくれていた夕飯をふたりで食べ、木兎は先に風呂を借りた。二階の赤葦の部屋で赤葦を待つ間の木兎は、さながら動物園の檻の中にいる熊だった。何度か訪れたことのある赤葦の部屋は緊張と期待からか見知らぬ場所のように感じられた。なのに大好きな赤葦の匂いと気配はそこらじゅうに満ちている。木兎は混乱した。ウロウロそわそわしっぱなしだった。

赤葦が部屋に入ってきた瞬間、木兎は思わず天を仰いだ。

風呂でリラックスしたせいか、いつもは隙のない赤葦（隙がないのに色気は駄々漏れ、というのが余計に性質の悪いところなのだが…）のガードはゆるゆるになっていた。部屋着らしいTシャツの襟ぐりもゆるゆるで、スッと伸びた首筋やくっきり浮かんだ鎖骨は見え放題。淡いピンク色に染まったうなじや目元は木兎の視床下部を刺激し、下半身をかなり落ち着かなくさせた。シャンプーやボディーソープの柑橘系の香りに赤葦自身の匂いが混じり、鼻孔をこれでもかと擽ってくる。風呂上りの赤葦は、まさに色気の爆弾であった。

これで行動を起こさない男は不感症か根性ナシのどちらかに違いないと言いたいところだが、いくら相手が「襲ってください」と言わんばかりの姿をしていても、「襲って欲しい」と思っているとは限らない――というのが世の理である。そうそう。道で見かけたキレイなお姉さんが、おっぱいが零れそうなほど胸元が開いた服を着て「触っていいわよ」と誘っているようにしか思えない様子で歩いていたとしても、合意なしでいきなり触ってしまったらそれは痴漢行為になるのである。つまりは立派な犯罪なのだ。

というわけで、赤葦が部屋に戻ってきて早々本能の赴くままに赤葦の体を引き寄せてベッドに押し倒した木兎は、犯罪者とまではいかなくても、歓迎されない非常識な輩であることは確かだった。

「あー……赤葦は『えっちは何回かデートしたあとでじゃないとダメ』派？」

未だ無言で固まっている赤葦から微妙に視線を逸らしながら恐る恐る尋ねる。
いやいや問題はそこじゃないんだ光太郎、と、頭の隅っこに追いやられていた理性がここぞとばかりに渋い顔で説教してくる。
……うん。わかってる。わかってはいるのだが。
無言の圧が怖くて木兎の口は戯言を繰り出し続けた。
「それとも……『付き合ってすぐ手を出してくる男ってサイテイ!!』派？　それとも、『ヤるにしたって雰囲気は重要でしょ?!』派？？」
全部だよこのヤリチン！　とか言われてしまったらショックだが、そうなったら潔く退くしかないだろう。しつこい男は嫌われるし。赤葦に嫌われたら立ち直れないし……。
今さら感いっぱいだが、やはり赤葦の意思が最優先だ、と木兎にしては殊勝な心持ちで赤葦の反応を待つ。
しかし。赤葦の口から出てきたセリフは木兎の想像とは少し違うものだった。
「いろんな派閥があるんですねえ」
「ハ、ハバツ？　……はないかもしれないけど、普通はそういう反応なんじゃないかなぁ」
「へえ、そうなんですか。でも俺普通とか知らないですし。女性と付き合ったことないですから。もちろん男ともないですけど」

「あ、うん、……そうだったな」
「俺が固まっちゃったのが悪かったんですよね、すみません。いきなり上に乗られてちょっとビックリしたので」
「ごっ、ごめんねっ?!」
「部屋に入ってすぐかよ！　噂通りだなこのヤリチンが！　とも思ってしまったので」
「うわぁぁぁほんとごめんっ！」
「別にいいです」
怒っているのか呆れているのかその両方か、淡々とした口調が逆に怖い。
「ていうか俺の噂って『ヤリチン』なの？　それはちょっとショック……」
バレー関連のことじゃねえのかよ、とショボくれかける木兎に赤葦が追い討ちをかける。
「でも事実でしょ？　実際、付き合ってる期間は短いのにやることはしっかりやってたみたいだし、新しい彼女もすぐ作ってたし」
「うぐっ……」
不名誉な噂は確かにほぼ事実である。反論は一言もできなかった。まあ、噂の内容は自業自得で仕方がないとしても、悪行のすべてを赤葦に知られてしまっているのがやっぱりちょっと苦しい。

ベッドの上で折り重なった傍から見れば色っぽいはずのこの状況で、恋人に責められるのはキツいものだ。刺々しくなってしまった空気の中、平然とコトを進められるほど木兎のメンタルは強くない。
ゆっくりと赤葦から体を離そうとしたら、下から伸びてきた赤葦の腕が木兎の二の腕を掴んだ。
「……赤葦？」
赤葦は眉間に軽く皺を寄せ、木兎から顔を背けている。
薄く小さな唇が、いつもは真一文字かへの字に結ばれていることの多い唇が、今は心なしか尖っている。……気がする。
これは……、もしかして、もしかすると……？　と、甘い期待が木兎の胸でじわじわと膨らむ。
「あの、もしかして赤葦、ヤキモチとか焼いてくれちゃったりしてる……？」
ツンと完全に尖った唇と、湯上りのせいでない目元の赤みが、木兎の期待とテンションを百パーセントに跳ね上げた。
さっき作ったふたりの体の隙間をゼロにする。
密着した胸から、薄いシャツ越しに赤葦の速い鼓動が伝わってくる。

「ふふっ。あかあしかわいいー！」
背けた顔から浮かび上がるすっきりとしたフェイスライン、涼やかな目元、きりっとした男らしい眉毛、まっすぐ伸びた鼻梁と、順に小さくキスを落としていくと、いつもの赤葦からは想像もつかないぐらいに慌て始めた。
身を捩ったり、木兎の胸を押し返そうとしたり。組み敷いた状態の相手がもがく様子は、興奮を煽るだけだから止めたほうがいいと思うのだが。雄の本能的に。
「かっ、かわいくはないです！　前にも言いましたけど、俺もゴリラに分類されるほうです！」
「じゃあ、可愛いゴリラ？」
「それはそれで嬉しくないです」
「まあいいじゃん。俺にとってはカワイイんだから」
見た目がどうこうではないのだ。いや、もちろん見た目も可愛いけれども！
何事にも動じなさそうなクールな赤葦が、木兎のことで、そして木兎の言動一つで拗ねたり妬いたりドキドキしたりするのが堪らなく可愛いのだ。
「かわいくは……ないです……」
「世界一カワイイよ」

赤葦は間近で突き合わせていた顔を思い切り横にそらし、
「……ほんと……もうヤダ……この天然タラシ……」
と、あえかな声で零した。
照れて困っている赤葦もやっぱり可愛い。
食べてしまいたいくらいに、どうしようもなく可愛い。
「こーゆー俺は嫌い？」
真っ赤に染まっている耳の縁に口づけながら訊いたら、
「世界一好きに決まってる！」
って、負けず嫌いまるだしの男前な告白をされた。

＊

ベッドに向かい合って座り、仕切り直しのように舌を絡めるキスをしながらお互いの服を脱がせ合う。と言ってもふたりともTシャツとハーフパンツの部屋着だったので、全裸

になるまでには一分とかからなかった。
　目の前の木兎の体に自然と手が伸びる。木兎の胸は赤葦の手の平でちょうど覆えるぐらいのふくらみがあって、それはもちろん女性の乳房のようにふわふわとした感触ではないが（尤も、赤葦は女性の乳房に触ったことはないのだが…）、少し力をこめれば指の腹を押し返してくるような適度な張りと柔らかさがあった。日本人にしては白いその皮膚の下に上質の筋肉が横たわっているのだ。筋肉の稜線を辿り視線と指先を胸から腹のほうへと下ろせば、見事なシックスパックにあたる。木兎は地味な筋トレが嫌いで、体を作るために特別なにかをしているわけではないらしい。それでもこんなに美しい体になるのだから不公平というか……、日々地道な筋トレに励んでいても筋肉がつきにくくパワー不足が悩みの赤葦はそれが羨ましくて仕方ない。そして、逞しくて男らしい木兎の体が、羨ましくて妬ましいのと同じぐらい大好きだった。
　胸から腹へと撫で下ろした指先をヘソの辺りで止めて肌から離す。そこより下方の銀色の茂みや、すでに芯を持ち始めていた木兎の性器からは気まずく目を逸らした。
「もう触らないの？」
　揶揄いを含んだ声で訊かれる。「触りません」と答えて顔を背けたら、
「そう？　でも俺はいっぱい触るよ？」

と朗らかに宣言されて体をベッドに押し倒された。
滑った感触が首筋を這い、ときおり肌を啄ばみながらゆっくり下へと移動していく。胸の粒にちゅっと吸いつかれ、尖らせた舌先で弾かれるたび、体が勝手にびくびくと跳ねて妙な声を漏らしそうになった。女でもあるまいし、男の胸にオマケのようについているものを弄られて反応するなんておかしいし恥ずかしい。唇を噛んで刺激に耐えていたら、指先で口元をとんとんと突かれた。
「コラあかあし、唇噛むな」
「だって……ヘンな声でます……」
「ヘンじゃないよ。赤葦のこういうときの声、聞きたい」
俺にしか聞けない声、と宥めるように囁かれる。耳にかかった吐息と声が甘ったるい。
「ぼくとさんも……それ、やめてください……」
「ん？」
「そういう声。……なんか背中がぞわぞわする……」
「おまっ…！」
なんとも言えないむず痒い刺激が背筋に走って擽ったいのだ…と訴えたら、焦ったように体を引かれて、次には呆れたような長い溜め息まで落とされた。なんだその反応。納得

がいかない。
「あのな、これはわざと出してんじゃねえの。自然と出ちゃうの。『あかあしカワイイ好き～』って思いながら触ってるから。それとな、その『ぞわぞわ』っていうのは気持ちいいってことだから素直に感じてろ」
「……言動がいちいち慣れすぎてて腹立つんスけど」
「ひでーな！　これでもすげー緊張してんだぞ？」
「うそばっかり」
「うそじゃねえよ。だってこんなに好きな相手を抱くの初めてだもん」
「……」
今までどれだけの相手とこんなことをして、どれだけこんなことを言ってきたんだろうか――、とか……。木兎の過去の相手に嫉妬するなんて馬鹿らしいし無駄だと頭ではわかっているのに、ドス黒く醜い感情は理屈抜きで腹の底から湧き上がってくる。それと同時に、可愛いだとか好きだとか、女の子が喜びそうな歯の浮く台詞にいちいちトキメく自分も鬱陶しかった。
「赤葦はどこ触られるのがすき？　どこ触られたい？」
「……初っ端から言葉責めとかハードル高いんスけど」

「いや、ちげーよ」
「じゃあぜんぶ。……ぼくとさんに触られるとこはどこでも気持ちいいですから」
「……あのなぁ」
感情の起伏は激しいほうじゃなかったはずなのに、木兎の言動一つで気分が上がったり下がったりと忙しい。
自分ばかりが翻弄されているのが悔しくて、つい、煽るようなことを言った。
それをこのあと、赤葦はたっぷりと後悔させられることになる。

「あっ……も…、……しつ…こいっ……」
ぜんぶ、なんて言ってしまったからか、木兎は手指、唇、舌のすべてを使って、赤葦の全身をくまなく愛撫した。赤葦が声を漏らしたり腰を跳ねさせたりと強く反応した部分は特に集中的に、舐めたり吸ったり甘噛みされて、じっくりしつこく攻められた。悪態をついても泣きを入れても木兎は止めてくれない。それどころか実に楽しそうに、身を捩って悶える赤葦を眺めている。
「これはしつこいんじゃねえの。丁寧って言うの」
「じゃ……、丁寧…しなくて……いい…から」

「乱暴なのがいい？」
「そ…じゃな…っ」
初めて他人から与えられる性的刺激が強烈すぎるのだ。頭の芯が痺れてぼうっとする。体は敏感になりすぎているのか、木兎の吐息が肌を掠めるだけで腰が震えた。
度の過ぎた快感を与えられると、気持ちがいいのか辛いのか判別がつかなくなる、と今日思い知った。
でも、体のほうは快楽に正直で、赤葦の性器は硬く勃ち上がり、屹先からは期待の雫を溢れさせている。
その状態を確認して、赤葦に覆い被さるようにしていた木兎が離れていく。シーツの上にくたりと体を横たえたまま、壁とベッドマットの隙間からローションらしきものを取り出した木兎をぼんやりと眺めた。「なんでそんなものがそこに？」と、突っ込む気力はとりあえずない。
「指、挿れてもいい？」
直截な問い掛けに答える気にはなれず、立てた膝をおずおずと開く。
両脚の隙間に木兎の膝が割り入ってくる。尻のあわいに滑りこんだ指が、奥に隠れたソコに触れる。他人に触れられることが皆無な場所に木兎が触れているという事実が、恥ず

かしさと興奮を同時に連れてきて赤葦は混乱した。
「あの……、ぼくとさん……」
心許ない気分になって、その気分の原因である木兎を呼ぶと、「あんまり煽るな」と意味のわからないことを言われた。気丈でクールを絵に描いたような男からの、縋るような声と視線がどれだけ木兎の劣情と嗜虐心を煽るのか、赤葦はあまり理解していないのだ。
しばらく後孔の周りを撫でて遊んでいた木兎の指先が中に潜りこんでくる。ローションをたっぷりと纏わせた指が、ずぶずぶと赤葦の中に入っていく。
おそらく一般の男子よりも太い自分の指が、たいした抵抗もなく埋まっていく感触に、途中で木兎は違和感を覚えたらしい。
「えーと、あかあし、もしかしてココ…、準備を――」
言いかけた木兎の口を、赤葦は手で叩くように塞いだ。
「言わないでください……」
風呂から部屋に戻った途端押し倒されて固まってしまったが、赤葦だって今日、木兎とこうなることを予想していたのだ。望んでいた、と言ってもいい。しかし期待に胸を膨らませる一方で、恐れていたこともあった。
木兎が今までに抱いてきたのはすべて、柔らかくて、特になんの苦労もなく木兎を受け

入れられる体を持った女性だ。いざ、男を抱くとなったときに、木兎は女の体との違いを強く実感するに違いないのだ。

やっぱりおまえじゃ無理だと言われてしまったら――。

それを平然と受け止められる自信が赤葦にはなかった。

硬い男の体は今さら変えられないが、せめて余計な手間を木兎にかけさせずに済む方法はないかと考えに考えた結果がこれである。冷静沈着で、何事もだいたい〇・五秒で最適解を導き出す聡明な赤葦らしからぬポンコツぶりだ。……まあ、本人はいたって真剣だったわけだが。

赤葦の手に口を塞がれたまま、木兎はじっと赤葦の顔を見ている。木兎の金色の瞳はいつも、木兎の内心を雄弁に語る。普段の赤葦なら今の木兎の思考も読めたかもしれないが、あいにくテンパったままだった。

よくよく考えてみたら、「挿れられる準備は済ませてあります」というのもなかなかのドン引き事象かもしれない。

「あの……すみません」

いささか乱暴な反応で赤くなってしまった木兎の口元を撫でる。なにを謝られているのかわかりません、という風に小首を傾げて、木兎はにかっと笑った。

「ありがと。でも次は俺にやらせろよ？」
「えっ？!」
「え、ってなに？」
「いや、だって……萎えませんか？」
赤葦の言葉に目を瞬かせたあと、木兎は赤葦の視線を誘導するように自分の股間へと視線を下ろした。
「これが萎えてるように見える？」
「見…えません……けど」
開いた足の間に座り、手を赤葦の尻へ差し入れているという傍から見ればかなり倒錯的であろう状況でも、木兎の性器はかなり強烈にその存在を主張している。……デカい。
「一体なにしたらそんなになるんスか……」
「赤葦が自分で後ろを準備してるとことか想像したらヤバかった。めっちゃ興奮した。今度見せ――」
「見せません！」
自分ひとりで準備しているときでさえＳＡＮ値の減りが激しかったのだ。それを木兎に見られながらするなんて、羞恥と屈辱で発狂するに決まっている。

「まあ、そっか。じゃあ、今日はちょっとだけ、な？」
「え、あ、はい……っ」
改めて圧し掛かってきた木兎にキスをされて、口内に滑り込んできた舌が動き始めるのと同時に、赤葦の後孔に差し入れられていた指がさらに奥までぐっと進んだ。揃えた二本の指を中でくるりと回したり、そっと抜き差ししたり、少し開いてみたり、赤葦を傷つけないようにと気遣っているのがわかるやりかただ。挙動が大きく大雑把な木兎には似つかわしくなく、丁寧で優しい。
肉厚の木兎の舌に口内の柔らかい粘膜を撫でられるのが擽ったいし気持ちいい。舌先をチュッと吸われて、鼻から甘ったるい吐息が漏れる。そちらの心地良さに浸っていられたらよかったのに……、下腹部に与えられる刺激のほうが強烈すぎた。自分で機械的にそこに触れているときはそれほど感じなかった圧迫感や、体内を弄られる奇妙な感触が、なんというか、本当に気持ち悪い。
「痛くない？」
「……今のところは……大丈夫です」
痛みはないが、いろいろモロモロ、辛いです。とは言えずに虚ろな目で答える。
「えーと、前立腺？　って腹側だよな？」

「……はい。性器の根元の…ちょうど裏側らしいです」
「んー」
「でも、そんなにすぐに、ソコで気持ちよくなったりはしないそうですよ」
「へえー」
やっぱり要訓練＆実践かー…と赤葦を震撼させるようなことを呟きながら、木兎は赤葦の内部を探るように指を蠢かせている。「今日はちょっとだけ」と言ったくせに。もう随分と長い時間後ろを弄られている気がする。
内壁に触れられる気色の悪さにはだいぶ慣れてきて、疼くような痺れるような感覚が腰全体に広がっている。
「あのさ、ここ、他の場所よりちょっとふっくらしてんの」
わかる？　と、その部分を爪先で軽く引っ掻くように撫でられ、腰の奥に溜まっていた痺れに刺激がじんと響く。
「なんか……へんな感じです……」
「じゃあこれは？」
グッと押すように擦られた瞬間、そこから電流のようなものが背筋に走って、赤葦の体がびくんと大きく跳ねた。

「あっ……、なに…っ…！」
「やっぱりここ、だよな。どう？」
「や、…わ…かんない……ですっ」
木兎は前立腺を二本の指で挟むようにぐりぐりと揉みながら、指の挿入で萎えていた赤葦のペニスを扱いて同時に刺激した。赤葦の口からは、はっきりとした喘ぎが漏れる。
「あっ…ん、だめ……、そこ、同時に、しないで…っ」
「でもきもちよさそう」
木兎の手から与えられる快感から逃れようと、赤葦は激しく身を捩った。シーツから浮き上がる体を強く押さえつけられる。
「やだ……っ、ぼ…くと…さんっ！」
「……あかあし」
赤葦の乱れる姿に煽られたらしい木兎が、情欲に塗れた切羽つまった声で赤葦の名前を呼ぶ。
「なあ、俺もう挿れたい」
「だめ…っ……むり……っ…」
「おねがい、あかあし……、挿れさせて」

言い終えるや否や、木兎は素早く赤葦の両脚を抱え、膝が腹につくような格好をさせた。あまりの格好に唖然としている間に、指とは入れ違いで、それとは比べ物にならないほどの質量のモノが中にぐっと押しこまれる。丹念に自分で準備したせいか、執着とも呼べそうなほどしつこかった木兎の愛撫のせいか、赤葦の後孔は悲鳴を上げつつも拒むことなく健気に木兎の猛りを飲みこんでいく。

繋がった部分に木兎の下生えを感じ、自分の中に彼がすべておさまったことを知る。足を開き体を折り曲げられた格好も、内臓が押し上げられる圧迫感も酷くて奇妙な感覚だが、無事に受け入れることができたことに赤葦は心の底から安堵した。

しかし。ホッとしていられたのも束の間で。

耳元で木兎が「ヤバい」と不穏な一言を零したからだ。

「ごめん、あかあし……、動いていい？」

いちおう許可を求めてはいるが、きっと、自分の思い通りにしてしまうのだろう。赤葦の中をいっぱいに埋めている木兎のペニスはどくどくと脈打って、余裕のなさを伝えてきている。

「はい」というかわりに、しがみつくように、赤葦は木兎の首に腕をまわした。

抜けるぎりぎりまで腰を引いて、また奥まで戻る、そんなゆっくりとした抽挿だったのは始めのうちだけだった。赤葦の内部が木兎に馴染んだことを感じ取った木兎は、早速、好きなように腰を振って赤葦を翻弄した。

「あっ、あ、……んっ、ん…っ」

揺さぶられるままに声を上げ、木兎から与えられる快感を必死に受け止める。少し前に見つけられた中の気持ちいい場所を木兎のもので強く擦られ、びくびくと体が跳ねた。頭の中が真っ白になって、瞼の裏に光が弾ける。

「ひっ…あっ、ん……ああ……っ」

「あかあし……あかあし、きもちいい？」

木兎の問いに応えるように、赤葦の内部がぐねぐねと収縮し、木兎のものに絡みついて扱く。木兎はさらに中を穿つ動きを激しくして赤葦を喘がせる。

「あ、あっ……んっ、ぼ…くとさ……あっ…」

「すきだよ、あかあし。だいすき」

激しい抽挿は続けたまま、木兎が耳元で甘い言葉を何度も繰り返す。俺も、と伝えたいのに、赤葦の口からはもう意味のある言葉は出てこなかった。

「ん……あ…んっ……ああっ…！」

木兎のもので最奥の敏感な部分を強く突かれて赤葦の熱が弾けた。収縮する赤葦の中で木兎のペニスが一層膨らみ、震える。内部にじわじわと広がる木兎の熱を感じながら、赤葦は霞む意識を手放した。

「赤葦って、俺のこと好きなんだよね？」
ボトルの水を赤葦に手渡しながら、木兎が首を傾げた。
恐らく、行為中に木兎から何度も与えられた「好き」に、赤葦が同じように返さなかったのを拗ねているのだ。
返せない状態にさせてたのはアンタだろ、と先程までのアレコレを思い返し、顔を赤らめつつ胸中で悪態を吐く。好きでもない男とあんなことができるか！　も加えて。
ちゃんと付き合い始めてからこちら、赤葦の口から「好き」の言葉が出たのは確かに数えるほどだ。……が。
木兎は期待を滲ませた瞳で赤葦からの「好き」を待っている。しかし素直にそれを口にしてしまうのは、ちょっとだけ癪だった。今まで散々待ったのは自分のほうなのだ。

「まあ、たぶん」
たぶんてなに！　と騒ぐ木兎を尻目に、布団の中に潜りこみながら赤葦は考える。
さて、いつ、ちゃんと伝えようか。
「たぶん、好き」なのではなくて。
「たぶん、木兎さんが俺を好きな百万倍、俺は木兎さんが好きですよ」って。

恋になるまで待って（了）